

編集後記

『大学史研究通信』第17号をお届けいたします。国立大学をめぐる独立行政法人化の一連の動きは、非常に問題を含んだものではあります。社会と大学の関係を問い直す機会でもあるのではないのでしょうか。その意味で、大学史研究がこれからの大学の考察に寄与する点は決して少ないものではないでしょう。

なお、本来ならば7月中に発行されるはずであった本号は、編集担当者の進藤が家族に複数の病人をかかえてしまったことにより大幅に刊行が遅れてしまいました。やむをえぬ事態とは言え、原稿をお寄せいただいた方および会員各位に多大なご迷惑をおかけいたしました。上記事情をご理解のいたされ、どうかご容恕下さいませようお願いします。

(事務局：進藤修一)

大学史研究会事務局

〒192-0003 八王子市丹木町1-236 創価大学教育学部 坂本辰朗研究室内 大学史研究会

TEL 0426-91-4602 FAX 0426-91-9309 EMAIL sakamoto@s.soka.ac.jp

『大学史研究通信』編集担当

〒562-8558 箕面市栗生間谷東8-1-1 大阪外国語大学外国語学部 進藤修一研究室内

TEL/FAX 0726-89-2140 EMAIL sshindo@post01.osaka-gaidai.ac.jp

# 大学史研究通信

New Series, No. 17, 20. Nov. 1999.

新入会員 (氏名五十音順、敬称略) 以下の方々が新たに入室されました。

井上 高聡 (北海道大学 125 年史編集室)

001-0019 札幌市北区北 19 条西 2 丁目 21-207 富樫荘 北海道大学 125 年史編集室

北海道教育史、北海道大学史

奥山 洋一郎 (東京大学大学院)

森林教育論、大学演習林史、農学教育史

中村 征樹 (東京大学大学院)

科学技術史・科学技術論・近代フランス

吉永 契一郎 (新潟大学)

950-2181 新潟市五十嵐 2-8050

新潟大学 大学教育開発研究センター

大学史、比較教育、比較文化

## 新入会員自己紹介 (氏名五十音順)

加藤 善子 会員 (大阪大学大学院)

私は、近代日本における西洋的趣味の普及・受容過程を研究しています。近代日本における文化変容という視点から近代日本の社会構造、階層構造をとらえ直すことが私の目標です。趣味 (特に西洋的趣味) は、近代日本においては高等教育に非常に関連があります。特に素材としてクラシック音楽愛好を選んだのは、文学や絵画と異なり、音楽は「音」を伴う趣味であり、誰もが近づけた趣味ではなかったこと (ブルデューに触発されたところが大きいのですが、彼によると音楽は最も身体化された趣味であり、その意味で音楽ほど個人をある社会的空間に格付けるものはないとされます)、そしてその趣味が最初は洋行者によってもたらされ、徐々に学生 (特に高等教育機関を経由した学生) に広がっていくという、興味深い現象が見られるためです。

これまでは昭和初期に時期を限定して、音楽専門雑誌や各種学生生活調査を用いてその愛好スタイルの変化と現代に通ずる愛好形態が確立される経緯を明らかにし、また職

業音楽家の名簿をソーシャルインデックスとして用い、彼らのキャリア・パターンを検討しました。その結果、評論家集団は音楽学校を経由せず、帝国大学やその他の一般大学を経由しており、演奏家もどちらかという音楽学校ではなく、映画館やカフェでたたき上げで演奏家になった者が多いということが明らかになりました。

現在は、明治にまでさかのぼり、貴族を中心とした上流階級（といてよければ）文化としてのクラシック音楽愛好をそのキャリアとネットワークを中心に研究を行い、これまでの研究をより大きな社会的・歴史的文脈に配置し、博士論文執筆にむけて研究をつづけております。ご指導とご鞭撻をいただきますよう、よろしくお願いいたします。

#### 福井 幸男 会員（関西学院大学商学部）

福井幸男と申します。関西学院大学商学部で統計学と情報関係の科目を担当しています。毎年、高校時代に数学をまともに勉強してこない学生が多いなかで、過去7年ほど、毎年300人近い学生をひっぱりっぱって教養の統計学を興味を持たせて授業を続けてきました。統計学を単なる数学の分科としてとらえるのではなく、科学思想の一つとして把握しようとする努力が実績があります。統計学を数学の一種としてとらえる学生が多いのですが、こうした固定観念を打破してその考え方、つまり少数の事例をもって全体を言おうとする帰納論の立場を強調しています。私が歴史に興味を持つのも、統計学の歴史を通じて、そうした思想の一端にふれてみたいという思いがあるからです。早島教授のドイツ商科大学の研究に刺激されたことも事実です。どうかよろしく願います。

#### 『戦前期における学生の下位文化としての音楽』

—その愛好スタイルを中心に—

大学史研究会例会（1998.07.28）  
加藤 善子（大阪大学大学院）

本発表は、近代日本における文化、特に西洋から輸入された文化の普及を音楽という材料を用いて史料を用いて考察することを目的としている。「音楽」という、形をもたない文化の愛好の歴史を社会学的視点から捉え直そうとすると、これまでに為されてきた音楽史研究が職業音楽家の歴史、また音楽教育史に偏っており、さらにラジオやレコード、雑誌メディアが普及し愛好者が増加する、消費社会が成立した大正・昭和初期における研究が明治期のそれに比べ著しく少いことが目をひく。この時期を中心として絵画や文学、また大衆娯楽に関する膨大な社会学的研究がなされているにも拘らず、音楽に関してはわずかにいくつもの音楽受容に関する通史があるのみである。主流の音楽史

#### 大学史研究会第22回研究セミナーのお知らせ

第22回研究セミナーは来る11月27日、28日の二日間、国立教育研究所（東京・下目黒）で開催することになりました。27日（土）午後に自由研究のセッションを、28日（日）午前に課題研究のセッションをおこないます。プログラムの概要（発表者と論題、課題研究の趣旨）は以下のとおりです。

11月27日（土曜日）

午後1時—3時15分 自由研究

奥山 洋一郎（東京大学大学院）

「戦前、戦中期の海外植民地演習林」

岡田 大士（東京工業大学大学院）

「東京工業大学における戦後改革『和田改革』—その議論の過程と改革の担い手たち」

午後3時30分—5時

特別講演

神木 哲男（中京大学経済学部教授）

「神戸高等商業学校の創設について」

11月28日（日曜日） 午前9時—12時 課題研究

大学史研究の課題と展望—「今、大学史研究には何ができるか」

発表者： 寺崎 昌男（桜美林大学）

鈴木 秀幸（明治大学）

塚原 修一（国立教育研究所）

司 会： 中野 実（東京大学）

「今、大学史研究には何ができるか」—これは、大学史研究会が産声を上げた1960年末という、あの大学“紛争”の時代、大学史研究会に結集した人々にとって、歴史研究という学問的営為をおこないつつも、脳裏を離れない問いであったはずである。

日本中の大学が“生き残り”をかけての大学改革に深く関与せざるをえない20世紀末という現在、再び、この問いは大学史研究者に突きつけられている。幸いにして、現在の大学史研究者は、60年代末には存在しなかった有利な条件—たとえば、本格的な大学アークライプスの設立、学問的評価に十分に耐えうる個別大学史の出現、高等教育研究という分野の認知など—をも利用できる立場にある。だが、むしろそれゆえに、「今、大学史研究には何ができるか」という問いは、さらなる重みをもって現在の大学史研究者に突きつけられているとは言えよう。

今回の課題研究は、世代や専門分野、職場が異なる三人の大学史研究者にこの問題について語っていただき、「今、大学史研究には何ができるか」をともに考え、大学史研究の課題と展望を模索してゆきたい。

にもかかわらず12名という多くの参加者をえることができました。

発 表 者：伊藤 敏雄（皇學館大学）

指定討論者：羽田 積男（日本大学）

坂本 辰朗（創価大学）

司 会 者：立川 明（国際基督教大学）

同書は、伊藤会員が構想されているアメリカ合衆国大学史研究三部作の第一作に位置づけられるもので、「農業国家、後発国家アメリカの大学が、なぜ20世紀になって世界の学問センターになり得たのだろうか。とりわけ、近代大学はどのようにして形成されたのだろうか」（同書1頁）という課題に解答をあたえようことをめざした大作です。教育行政と大学史をクロスオーバーさせた手法、ミシガン大学を描きながら常に州の教育全体を視野に入れることで立体的な執筆の構成など、指定討論者から本書の優れた特徴として多くの点が指摘されました。

指定討論者によるコメントが終了した後、参加者によるさわわめて熱心な討議が展開されました。論点は多岐にわたりましたが、やはり「近代大学とは何であったのか」「ミシガン大学がそうであったというのか」、理念においてそうであったというのか。それとも実態としてもそうであったというのか」という点に集約してゆきました。この点、ドイツ近代大学史研究の潮木守一会員が出席されていたこともあり、比較史的な観点から多くの興味深い議論が提起されました（坂本記）。

#### 大学史研究会例会記録4

1999年度第3回例会は、去る7月17日、午後3時より慶應義塾大学（三田校舎）にて、阿久津正幸氏（慶應義塾大学院・日本学術振興会特別研究員）を発表者に迎え、米山光儀会員（慶應義塾大学）の司会で開催されました。阿久津氏はイスラーム史の研究者ですが、今回の発表は「中世イスラーム世界の高等教育施設マドラサについて——その歴史的・社会的評価をめぐって」と題され、イスラーム世界に普遍的な教育制度として存在するマドラサについての研究の一端を披露していただきました。

マドラサの誕生は11世紀からで、セルジューク朝やアイユーブ朝の時代に組織的な設立が始まるわけですが、それは中世大学史のはじまりとほぼ重なることとなります。通説では、ウラマー（イスラームの学者・宗教指導者層）の養成に当たったとされ、モスクと密接な関連を持っていたとされるこの教育機関は、具体的にとどのような社会階層によって支持され、どのような社会的機能を果たしたのか。阿久津氏の発表は、欧米における最新の研究成果はもちろん、アラビア語の一次史料にもとづいて考察されたもので、参加者に大きな知的刺激を与えた（坂本記）。

は、どのように音楽が教育され、演奏されてきたかは語ってきませんが、それが一般の人々にどう受け入れられたかは語っていない。音楽史が扱ってこなかった、この空白の時期に増加したと思われる愛好者と愛好スタイルの形成を、ここでは愛好者としての学生を中心にすえて考察し、西洋音楽がどのように職業としてまた趣味として社会的な意味を獲得して行ったかを、わずかな通史とその他断片的な資料を用いて再構成することを試みた。

ここで中心に検討したのは、以下の三点である。

1. 誰が職業として音楽を選んだのか。ここには演奏家と評論家のキャリア・パターンが極端に離れていることを示した。前者は軍楽隊退役者や、カフェー、ダンスホール、映画館、百貨店の少年音楽隊等出身者で、ほとんど教育を受けていない。しかし、評論家は音楽ではなく、旧制高校から高等教育を経て、何かしらの本業（主に専門職）を持ち、サイドワークとして評論活動を行っていた。2. 学生を中心とする聴衆はどのように形成され、その愛好スタイルはどのようなものであったか。各種学生生活調査によると、昭和10年代に学生の3割から5割が「音楽」を趣味として挙げるようになった。彼らは言うまでもなく当時の高等学校を支配していたいわゆる「教養主義」の洗礼を受け、西洋の文学や書物から間接的に音楽を知ることになった。そこに、同様の学歴を持った評論家の書いたものに出会い、単に「音」を楽しむわけではなく、西洋の美学理論と語学力を基礎に、非常に精神的・内面的に音楽に接することになる。当時の愛好者たちの自伝や伝記からは、スコア（楽譜）を手にして一日中音楽喫茶に入り浸り、ベートーヴェンを聴いてはそれに涙し、没入する学生愛好者の存在が浮き上がってきた。

3. 当時の洋楽愛好にはどのようなスタイルがあり、学生の愛好スタイルはどこに位置付けられるか。近代日本において音楽ジャーナリズムが一応の成立を見たのは、昭和初期である。昭和2年に始まった新交響楽団（現・N響）の月2会の定期演奏会は終戦直前まで続き、そしてクラシック音楽専門雑誌は昭和6年に次々と発刊され、昭和16年の雑誌統合まで廃刊になることなく続いた。昭和以降に不特定多数の聴衆が成立したのである。当然、それから様々な愛好スタイルの是非を巡る論争が生じることになるが、なかでも最も重要と思われるのは、演奏会派とレコード派の対立である。演奏会での一回切りの生演奏を他の聴衆とともに音楽を楽しむ者はレコードを「缶詰音楽」と批判し、レコード派は演奏会では音楽に集中できず、かつ演奏が下手なために芸術性を感じられないと対立する。いうまでもなく多くの学生愛好者は後者に属しており、孤独なオタク的な音楽鑑賞に固執していた。

学生たちは、評論家たちとその心性を共有しており、その西洋的知識と西洋至上主義を基礎としたアイデンティティを西洋音楽（のレコード）に投影していた。「西洋乞食」でしかなかった音楽家（特に演奏家）が、多数とはいえないまでも高等教育機関から輩出されているのは、このような背景からであろう。このことは、西洋音楽の社会的意味とその位置を大きく変えることになったと思われる。私たちが今抱いているクラシック

音楽のイメージは、彼らによって作られ、正統化されたのである。もちろん、他の西洋的趣味や日本の芸能との関係、より大きな社会的文脈のなかに音楽愛好を位置付け直すことは、今後の課題として取組んでいきたい。

#### 大学史研究会例会記録2

#### 大学における官僚制度形骸化の歴史\*

中山 茂\*\*

研究・教育の論理が官僚制度になじまないことは、自明である。軍隊や税務署などの官僚機構の上意下達の命令機構・管理機構と、未知のことを探求する研究、人間の能力の伸長を扱う教育とは、論理が、目的・機能がまるきり違う。

ところが日本を初めとして、それ以後に近代化された国、つまり非西欧国家では、主権国家が先にある、国家が大学をつくる。その場合ふつう大学は官僚制度の一環として、その制度に従属した形で出発する。明治日本の場合、明治初年の「大学」は役所そのものであったし、開成学校、東京大学と発展しても、「文部の学校」といわれていた。帝国大学になって、ドイツ大学の研究至上主義を取り入れようとして、講座制を導入した。講座とは *Lehrstuhl* の翻訳であろうし、ドイツ大学の *Seminar, Institut* を真似て、講座費を出すことになった。

しかしその後、官僚制度の中にあると、研究教育の論理と矛盾することになる。ドイツの大学では講座名は知的最前線の変化に応じて絶えず変わって行くが、日本の官僚制度の中では、時代の変化にはついていけない。矛盾が文科系ではイデオロゴ的に意識されるようになると、官僚制度からの独立を図ろうとして、大学の自治、学問の自由という要求を出して、歴史に残るような衝突を起こすが、ふつうは特に理科系ではこつてり官僚制度を形骸化し、その圧力を回避しようとする。

国家機構の一部としてつくられた大学が、其の大本の国家のルールを変えることは容易ではない。講座名を変更するには面倒な手続きを取らねばならない。そこで理学部など研究至上主義を唱えるところでは講座制を形骸化した。物理学科では、教授たちは自分がどういいう講座を引き継いでいるか知らないのが普通となっている。おそらく事務の方で文部省に出す書類の上では、古い講座名に教授名を適当に当てて報告しているのだろう。

法と秩序の守り手の法学部はじめ文科系の学部ではいまだに講座制が癒だと云う議論が行われることがあった。まだまだ形骸化度が足りないからである。講座という官僚ポストがまず厳然としてあり、それに人が配置されるのである。私大は官僚制度の枠外にあるはずであるが、文部省の許可を受けざるなど、官僚制度に接触する面で、どうしても官僚制度の論理に従属させられることになる。

もっとも、官僚主義の形骸化は歴史的必然である、とは断じられない。二十世紀に国立研究所、巨大科学の論理が官僚機構の論理に似ているので、大学の間尺にあわず、宇宙科学研究所、国立天文台などは大学の外に出て行って、文部省直轄となった。日本はそれほどのこともなかつたが、戦後冷戦下の世界の科学構造は、原子力や宇宙の巨大冷戦科学技術を中心として組織されていて、古き良き大学の自由・自治よりも、巨大組織が主流となっていた。

しかし、九十年代になって、冷戦機構が崩壊し、大学や研究教育の世界も脱冷戦レストラを強いられることになった。ではこれからどういう方向へ行くか。科学界がインターネットによって脱国家化、跨国化（トランスナショナル）する傾向が加速的に強まるものと思える。すると、やはり主権国家の官僚制の論理はますます形骸化されることは、火を見るよりも明かなトレンドである。

\*この論文は一九九八年一二月六日に関西学院大学で行われた大学史研究会で報告されたものに、勤務校紀要編集部の求めで、大学史研究に出すこととの了解の上で、多少違つたヴァージョンを『神奈川大学国際経営論集』に載せた。

\*\*神奈川大学経営学部

Shigeru Nakayama, "Toward a History of Deconstruction of University Bureaucracy"

#### 大学史研究会例会記録3

1999年度第1回大学史研究会例会は、1999年4月24日(土) 東京・新大久保 白線クラブにて「戦前の外地校について」という講演会を、外地校研究懇話会との共催という形で開催しました。コーディネーターは本会会員でもある本多二朗氏で、外地校という「学校組織そのものが消滅し、(外地校懇話会) 会員も古希を迎えている今、歴史を伝えるためにもこの会を始めました」と趣旨説明がありました。講師は吉村維謙氏と金崇文氏のお二人で、吉村氏は外地校の概観を、金氏は奉天農大での自らのご経験を主にお話しくださり、戦前の外地校についての制度にかんするお話や学生生活など多彩な内容を知ることができました。大学史研究会のメンバーからも、事務局坂本氏や中山茂氏をはじめとした多数の参加者があり、両会の交流に寄与した例会であったと思います (進藤記)

#### 大学史研究会例会記録4

1999年度第2回例会は去る5月28日、午後6時より国際基督教大学(東京・三鷹)にて、伊藤敏雄会員の新书推荐『米国近代大学史研究——ミシガン大学を事例として——』(風間書房、1999年2月刊)の合評会という形式で開催されました。夕刻からの開催

形骸化の例をもう一つ取ろう。私は三十年近く国立大学で教えていた。ある時、事務から電話がかかってきて、「先生はご存じないでしょうが、私たちは先生の出勤簿に判子を押ししています。ところが、先生には他の国立大学四カ所から集中講義の依頼が来ます。そうすると規定上主務校の出勤日数が足りないことになって、困るんです」と。私はそうした出勤簿の存在を知らなかったし、ついに定年まで出勤簿というものを見る機会がなかった。歴史の上のどこかで国家公務員の規定にある出勤簿を形骸化したのである。

あるアングルからすれば、日本の近代大学の歴史は、官僚制度のサブシステムとして生まれた大学が、研究教育という本来の目的に添って、大学の制度を形骸化してゆく努力の歴史であった、といえる。こういうことは、公式の大学史には書いてない。だから、何時からそれが始まり、どうなって形骸化が発展していったかを抑える史料が乏しい。あるいは史料を残してはいけぬ種類のものであったのかも知れない。

今でも文部省の費用で外国出張する時などには官僚制度の枠内にあることを意識させられる。六十年代まで国立大学の教員は公用旅券を取るようになっていて、それが戦後盛んになった教員の学界活動に非常な支障を来すことになった。ある国で行われる国際学会に出席して、折角来たのだからそれとなりの国の研究者を訪れて、見聞を広めようと思っても、公用旅券には行き先の国が明記されていて、それ以外の国を訪れるには、旅券に訂正追加を書き入れねばならない。そのためには本国に連絡して許可を受けねばならない。それには三ヶ月かかる。事実上不可能なことである。

これはおそろしく明治の頃、ヨーロッパに何ヶ月もかかって船で行き、現地の港で大使館員の迎えを受け、常に在外公館と連絡を取って、帝国官吏が洋行していた頃の規則であろう。あるいは国家の利益を代表してネゴシエーションに行く行政官僚のための規則であろう。六十年代の当時日本はまだ貧しくて、たいいていアメリカのカネで海外に出ていた日本の科学者にとっては、何故日本国家の規則に縛られなくてはならないだろう、と思つたものである。公用旅券のメリットは、旅券取得にカネがかからないこと、通関が速く済むことくらいであった。

文部省では国立大学教官の公用旅券を一般旅券に代えることは思いつかなかつた。やとつとそれを知つて外交官の息子で国際感覚を身につけた一文部官僚が、関係諸官庁と連絡して、国家公務員にも一般旅券を出すように規則を変えた。形骸化しないで、制度を変えるには、これだけのことも、大変なことなのである。当時、親しかつた文部官僚に「大学の先生は公用旅券を有り難がついていないんですね」といわれて、今頃気がついたら、と思つたものである。

形骸化しても、つい古い形骸にかかずらわうことになって、古い革袋には新しい酒を盛り込むには限界がある。ノーベル賞が東大から出ずに京大から出たのは何故か、これは私たち科学史家がしょっちゅう聞かれる難問であるが、湯川秀樹がああの仕事をしたの

は、出身校京大でもなく、新興の阪大にいた時だということを考えられたい。新しい大学には常に新しい酒を盛り込む革袋(新しい講座や研究所)が用意される。それが東大→京大→東北大・九大→阪大→名大という戦前の研究最前線の動きであった。古い革袋の形骸化は、それに比べると姑息な手段に過ぎなかった。

中世に始まる欧米の諸大学は、大学のパターンが近代国家官僚制よりずっと早く確立している。後から出来た官僚制度を取り入れる必要も、したがってそれを形骸化する必要もなかった。大学に固有な教育・研究の論理で自前のルールづくり、制度作りをし、それを時代に合うように自らを変えて行けばよかつたのである。近代になって、近代主権国家の論理が大学に干渉しようとすると、大学の自由・自治の問題が発生するのである。ナポレオンがアインジャン・レジームをつぶして、専門学校(グラン・ゼコール)をつくって官僚制に従属させたのは、科擧の制度と同じように、国家による官僚の選抜制度であつて、教育研究の論理によるものではない。専門学校、プロフェッショナル・スクールは、大学・大学院よりも近代国家の「合理性」を貫く要請に沿うようにつくられることが多い。

中国の場合は、隋唐以来科擧の制度と共に、教育は官僚制度に従属し、研究は制度化されなかつた。北京大学は東京大学の真似をしたところがあるというが、たしかに国家がつくつたという点では共通している。

私は一八九〇年に北京日本学センターというところで大学院生に講義し、一八九八年に又依頼されて講じることになったが、その八年間に日本側が中国側に主導権を渡そうとする過程で、中国の官僚制の締め付けが厳しくなつていくことを体験した。大学院生もまた我々外人教官にも管理が厳しくなつて、教育研究の実が上がらなくなつていた。管理する役人側は成績を上げるためにか、やたらと小中学生に対するような管理を厳しくし、教室に出来るだけ多く縛り付けようとする。性悪説に立脚した一般的管理原則に従わせることを官僚の仕事と考へているらしい。例外は許さない。日本の文部省に当たる教育部からの命令で、半期十八週間と過大(ハーバードなど十二週間)、さらに出来ればそれよりも多い時間を課せようとする。彼らには教室に出ていることが勤務レイバード、それ以外はレジャーと考へるのだろう。教育や研究は両者を止揚したワークであることは理解できない。

この制度下の大学院生は自分で本を読み、思索し、論文を書く自分の時間がなくて、研究者として独立出来そうにない。中国人の関係者、教授、学生も、その点を指摘するが、大学院などの経験もなく、何もわかつていない教育部の一般的管理政策に抗し得ない。その点、日本の大学の方がずっと官僚管理制度の形骸化が進行している。中国政府にも教育研究の論理を理解している官僚も一部にはいるはずであるが、大勢には抗し得ない。形骸化の進行の程度において、この情況は日本の歴史ではどこらにあたるのか、と考へてみるが、まだ明治初年であるのかも知れない。